第 節 勝 山 町 域 0) 弥生時代 . の遺

度

生時代 営むのに適した低い $\stackrel{|}{\stackrel{3}{\circ}}$ Щ 1の遺 町 は京都平 跡は三〇 野 台地や丘陵が随 0 か所以上 西 部に位置 確認されている Ļ 所に見られることから、 弥 生 時 代 0) ② 2 | 集落や墓地 48 表 2 弥 を

保地 特定が困難な遺跡も多い は 田だ 地区でも未調査の住居跡の存在が予想される遺跡がある なかには古墳時 町内各地で一〇か所程度ある。 「地区など数少ない 墓地 このうち集落に関係する遺跡は、 区 については、 北西部の長川地区などで発掘調査されているが、 代に下るものも含まれていて、 が、 発掘調査で確認された遺跡は長川 石棺墓や甕棺墓が発見されてい ただし、 東部 の黒田: 石棺墓や石蓋土壙墓 地 詳細、 区 や南 な時期 地 、る遺跡 区 部 ー や 箕^み 他 0 久 0 0

以上にのぼっていることは非常に残念である。 開発に伴って全部又は一 このように町内に数多く分布する弥生時代の遺 部が消滅してしまった遺 跡 跡 が Ŕ \bigcirc 様 ゕ 々な 所

田 地区 遺 跡

度にかけて広範囲で発掘調査が実施された。 田 地 区 一では圃 場整備事 業に伴 1 平 成 + 調査地点は十 年 -度から 十 六年 年

> 時代の 四年 され 住居跡や貯蔵穴である。 跡が集中的に発掘された。 考えられる。 人用の集団墓地は今回調査対象となった、 が -度は黒| ている低台地や谷部にはなく、 遺跡 か 派、 田 は大部分が中期から後期 十二年 下原出口 度 1遺跡、 が 一部で小児用甕棺が検出 これらの 四 十 五 か 所 低丘陵上に立地するも 調査地点で確認され 十六年度には 0) 十三年度が 時期に属する集落 現在水田として利用 0 されたが、 黒田 か 工 所 た弥 閺 ノ で、 係 ヲ遺 0) 成 + 0) 生

的な内容が比較的良く理解された、 ノヲ遺跡に ここでは黒田 ついて概観 地区遺跡群のうち してい 調 黒 査面積が広く、 田 下 ·原出 \Box 遺跡と黒 遺跡 0 全体 田

物跡の多くは古墳時代以 期から古墳時代初頭の時期に属し、 以降の住居跡 る ○平方㍍の面積が発掘され、 出黒 (写真2-口田 遺 下 跡 原 8 0 建物跡の他に鎌倉時代の土壙墓も発見されて ら北東にの 住居跡 |遺跡は黒田神社の北 降のものである。 几 びる低台地上に立地する。 $\overline{\bigcirc}$ 弥生時 軒弱 のうち大部分は弥 総数七五棟以 代後期の 東約四〇〇公で、 住居跡と古 に達する建 生 約 嵵 **|墳時代** 南 八 代後 Ŧī. 西 か

に屋 二本又は四本の主柱穴をもち、 1.普遍: 弥生時代後期の住居跡 内 十 的に見られる構造のものである。 壙、 その 他 0 壁際にべ 0 形態は、 床面 ツ ド 基本的に方形 状遺構を配置する京 の中央部に炉、 0 入口 平 面 築地 形 0) 壁 で、 域

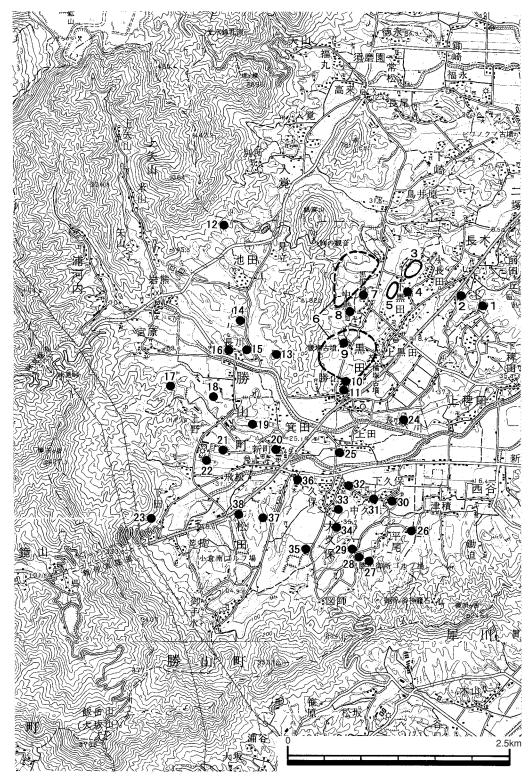


図2-48 勝山町内の弥生時代遺跡分布図

表 2 - 3 勝山町内の弥生時代遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時期	弥生時代の概要	備考
1	安藤池東遺跡	上黒田	時 期 弥生~古墳		消滅
2	安藤池西遺跡	上黒田	弥生	散布地、丘陵裾、住居跡?	1月1950
3	黒田エノヲ遺跡	黒田		集落	
4	原遺跡	下黒田	弥生~古墳	散布地、低台地、住居跡群?	一部消滅
5	黒田下原出口遺跡	黒田	弥生・鎌倉	集落	DP1110%
6	黒田地区遺跡群	黒田	弥生~古墳	大伯	
7	梅林遺跡	中黒田	弥生~古墳	 墓地、低丘陵上、箱式石棺墓 7 基以上	一部消滅
8	永敬寺裏遺跡	中黒田	弥生	中期の墓地、箱式石棺群・甕棺群	HP113 W/A
9	二又池東遺跡	中黒田	弥生~古墳	中期の墓地、箱式石棺・甕棺、刀・剣・鏃・ヤリガンナ	一部消滅
10	勝山中学校遺跡	中黒田	弥生	散布地、低台地、住居跡群?	一部消滅
11	勝山遺跡	中黒田	弥生~古墳	散布地、低台地、住居跡群?	HI IIV
12	小松池西遺跡	池田	弥生~古墳	散布地、山麓の扇状地	
13	清地神社遺跡	長川	弥生~古墳	墓地、低丘陵、箱式石棺	消滅
14	小長川遺跡	長川	弥生~古墳	中期の集落、後期の墓地	
15	長川西遺跡	長川	弥生中期	散布地、河岸段丘上	
16	鎮 西 遺 跡	岩熊	弥生	前期~中期、住居跡?石器製造跡?石庖丁未完成品・壷	
17	亀田池遺跡	箕田	弥生	散布地、小丘陵、住居跡? 甕棺、土器・石庖丁	
18	キベガ迫遺跡	箕田	弥生~古墳	墓地、丘陵上、土壙墓・甕棺群・木棺墓	
19	箕田大池遺跡	箕田	弥生~古墳	散布地、低丘陵上、石庖丁・石斧	
20	三島山遺跡	箕田	弥生~古墳	墓地跡・住居跡群?箱式石棺30以上、石剣・石鏃・鏡片	大半消滅
20	下所田遺跡	箕田	弥生~古墳	墓地・箱式石棺墓・石蓋土壙墓	三島山遺跡内
20	上所田遺跡	箕田	弥生	後期の墓地、石棺墓他、銅鏡 2 面	三島山遺跡内
21	亀田南遺跡	箕田	弥生~古墳	後期~古墳前期の墓地、埋葬施設 7 基	
22	上 野 遺 跡	松田	弥生~古墳	散布地、丘陵上、住居跡?	
23	下 田 遺 跡	松田	弥生	祭祀址、山麓、岩陰遺跡	消滅
24	上 田 遺 跡	上田	弥生~古墳	墓地、河岸段丘、箱式石棺、伝鏡出土	
25	上田片岸遺跡	上田	弥生	溝状遺構	
26	高来池西遺跡	平尾	弥生	散布地、丘陵先端、住居跡?蛤刃石斧・土器	消滅
27	雁俣池北遺跡	平尾	弥生	中期の散布地、丘陵間扇状地、住居跡?土器	
28	平尾西遺跡	平尾	弥生~古墳	墓地、丘陵先端、箱式石棺	消滅
29	平尾西台地遺跡	平尾	弥生	中期の墓地、箱式石棺・甕棺・土壙、石斧・土器	
30	曼陀羅寺東遺跡	下久保	弥生~古墳	散布地、低台地上、住居跡?	
31	吉 松 遺 跡	中久保	弥生	散布地、低台地上、住居跡?	
32	大 薮 遺 跡	上久保	弥生~古墳	中期の散布地、低台地上、住居跡?	
33	大久保今地遺跡	大久保	弥生~中世	貯蔵穴2基・土壙	
34	上久保南遺跡	上久保	弥生~古墳	散布地、低台地上、箱式石棺墓・土壙墓	一部消滅
35	大久保掘生遺跡	大久保	弥生~古墳	後期の住居跡24軒	
36	上久保遺跡	上久保	弥生~鎌倉	貯蔵穴1基	
37	大古野池東遺跡	図師	弥生~古墳	墓地、丘陵上、箱式石棺群	一部消滅
38	大古野池西遺跡	飛松	弥生~古墳	散布地、石鏃・土器	



黒田下原出口遺跡全景 (勝山町教育委員会所蔵)

ることから、 その幅は○ いる。 入口

ベッド

状遺構は入口側

の 一

辺を除く三辺すべてにあり、

に向

かって二・二

に

の
位置に

四

本が配置されている。この

他に

入口とは反対の奥の両隅に柱穴が検出されている。

側の中央部壁際にあり、

炉跡も床面の中央部に設置されて

屋内土壙は

と考えられる。

号住居跡で検出 みられる。 設置されている されているよう の住居跡では5 柱穴は他の主柱 ものがいく 0) 両隅に柱穴が 当遺跡の後期 床面の奥側 つか

よる焼失家屋か 住居跡は火災に ・八江前後である。 (O (**o**) 床面全体に炭化物が散在してい 6 0 14.90m 3m

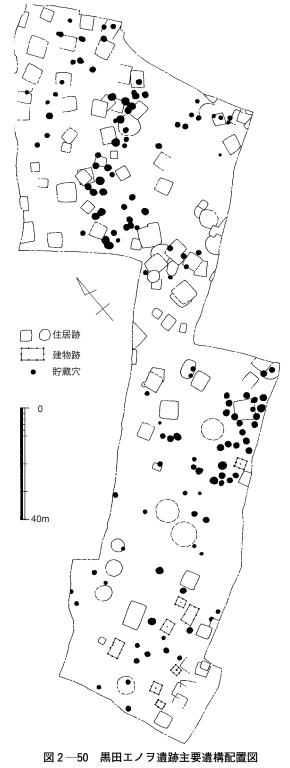
図 2 ─49 黒田下原出口遺跡 5 号住居跡

検出 を呈する竪穴住居跡である。主柱穴は床面の中央から四隅方向 5号住居跡 面で幅六・ ② 2 | 三八㍍・長さ五・ 49 は遺跡の の中央部付近に位置 六八㍍のやや長方形 の平 遺 面 形

比較的短いものであったと考えられる。 性が高いことなどの特徴がみられる。 重要な施設と推定されるが、 穴と比べても掘方が十分大きいことから、 をそろえる傾向が強いこと、 の意味は不明である。 合うものがごく少ないこと、 る黒田 集落は多くの家族集団によって短期間に営まれ、 全体として一つの大集落を構成していたものである。 エノヲ遺跡と同じ丘陵に所在し、 また、 まだ他遺跡での 個々の住居の構造にも規格 当遺跡の住居跡には相互に重なり 南東側に入口を向けて主軸 これらのことから当遺跡 なお、 住 かつ近接することか 一居の構造に関わる 類例が少なく、 当遺跡は次に述 存続期間 0 方位 統 そ

> するものである。また、 生時代中期で、それ以外は弥生時代後期から古墳時代初頭に属 確認されているが、約一○%が古墳時代後期、 0 と、古墳時代以降の建物跡も約一○棟検出されてい が発掘され、 遺黒田エノヲ 集落が調査されている 主として弥生時代中期から古墳時代後期にかけ 当遺跡は黒田 跡である。 弥生時代中期の貯蔵穴が約 ② 2 | 約三万二〇〇〇平方景の広 下原出口遺跡の 50 住居跡は一〇〇軒 北東側に近 一五%ほどが弥 匹 接する 41 ほど 0 面 基 積 7

に北側に位置する中期の円形竪穴住居跡である。遺構検出面で一六三号住居跡(図2―51・1)は当遺跡の中央部よりわずか



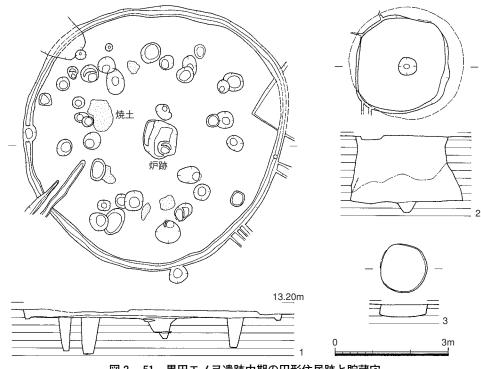


図 2 --51 黒田エノヲ遺跡中期の円形住居跡と貯蔵穴

る。

て幅が狭まり、 壁面上位に向か

立ち上がり、 梯子を固定する浅 深さは一・七六片 表面近くで垂直に には昇降のため スコ状を呈する。 穴が設けられて 床面の・ 中央部 フラ 0

大形の貯蔵穴であ 断面の形状は 地

写真 2 — 9 黒田エノヲ遺跡後期の方形住居跡 (勝山町教育委員会所蔵)

期の遺構である。 出されているが、これは炉跡以外に屋内で火を使う作業をした 痕跡か、それとも単に焼失家屋であるのかは不明である。 は深いもので一

だに達するものもある。 に位置し、 直下に幅約二〇點 二一号貯蔵穴 主柱穴は七本前後で構成されるものと考えられ、 長さ一・〇メバ (図2-51・2) は調査区の北部に位置する 床面が直径三・○四㍍の円形をなす、 の周溝をめぐらす。 幅〇・九㍍の隅丸方形の平面形をな 炉 がは床面のほぼ中 床面の一部で焼土が検 その 非常に 深さ 央部 中

規模は長径六・ 九七次、 短径六・八六點とやや大形で、 壁 面

模は幅九・二八

長さ五

居跡である。 位置する竪穴住

規

調査区の南部に

図

2

52

六㍍と非常に横

り合う貯蔵穴である。 上部が削平されているためか、 二三号貯蔵穴 ||三号住居跡 (写真2-9) (図 2 51 3 は調査区北部に位置する後期 深さは〇・三二片と浅 は二二号貯蔵穴の西 側 で重な

平面形を呈し、 竪穴住居跡である。 置 つされ 7 W 床面中央部にある炉跡の両側に二本の主柱穴が 幅五・ 六一

| 六一
| 以、長

| 表
| 長

| 二
| 五
| 比

| の
| 長 方形 0 0

る。

柱穴は両長辺に六本ずつ、

両短辺に四本ずつですべて壁際

はなく、

壁際にはほぼ全周にわたって浅

W

溝がめぐらされ

7

ベッド

·状遺構

る。

それ以外は確実ではない

が、

四隅と中

炉

跡

0 両

側

六㍍前後の位置に二本、

計六本が当住居跡の柱穴の可能性があ

る。

に配置されており、

全体として桁行五間・

梁間 央の

三間の形態をと

に、

長さ約

• 0)

○
どの長方形の屋内土壙がある。

形

の平

· 面形

炉跡があ

ŋ, 床

入口 面

|中央部

壁面より

わ ず

か 0

内

側 円

長

0

大形

住

居跡である。

0

中

央部に径 の

約〇

九ば

ほ

ぼ

0 0 3m

側の北半に作ら

短辺全体と奥

れている。

四八号住

居跡

ド状遺構

は

両 ベ 0

側 ッ 壁

際にあり、

人口中央部

る。 配

屋内土壙は

図 2 -52 黒田エノヲ遺跡後期の大形住居跡

に発 推定される瓢形の珍し が 高杯・器台などの土器 貯蔵穴からは保存状態 跡のなかではもっとも の良い中 多くなってい 器形の土器もみられ 多量に出 出 (写真2-祭祀に使用したと 掘された町 土 遺物 期 の壷 の量は過去 10 土し る。 内 · 甕 ってお また 特に 0) 潰



写真 2-10 黒田エノヲ遺跡出土土器

期

0)

ている どの各種の大陸系磨製 斧・片刃石斧・ 石器も数多く発見され (写真2— 石剣 11 な

貯蔵穴は約一 軒前後が確認できる。 ものも目立つが、 がまったく残存しない いるものが多く、 大きく削平されて 四〇基が 壁面

住居跡一

検出されているので、



黒田エノヲ遺跡出土石器

ろう。 時期の 蔵穴の も床 度の大きさを示すとともに、 考慮する必要があるが、 共通している。 亩 割合 0 割合は約九基となり、 直 |径が三景を超えるような大形のものがみられる点で (七・七基) と近い数値を示す。 地山の土質の硬軟による耐久度やその大きさも 貯蔵穴の数の多さは農業生産への 下稗田遺跡の中 収穫量の豊かさを物語るものであ また、 ・期前葉から中 規模の 依存 面 葉 0 で

柱穴が壁際に配置されていることやベッド状遺構がないことに 後期 0 住居跡で では四八号住 居跡が他とは異質な構造をもつ。

> れる。 加えて、 宅ではないかと考えられ この 特にその規模が通常 住居跡は集落の集会所的な施設か、 の二倍の の面積をもつことが 又は首長層の居 あ ごげら

かは今後の詳細な分析が必要であるが、 落となっていたであろう。 る大集落を構成していたと推定され、 と住居跡は百軒を超えるし、 発展したことは確実である。 中期 の集落と後期の集落の間に隔絶する時 近接する下原出口遺跡と合わせる 未調査部分も含めるとこれ 京都平野南西部の拠点集 後期には集落が大きく 期 が あっ たかどう

久保地区遺跡群

る。 0 地区の集落南方に広がる標高三〇~五〇㍍の台地上に展開 遺跡が発掘調査されている。 久保地区遺跡群は長峡川の支流である初代川の南側で、 圃場整備事業に伴って平成六年から八年にかけていくつか 久保 す

大久保今地遺跡

当遺跡は上久保集落の南東側

で、

標高二八

出 ことから古墳時代の遺構と考えられ されている。 形竪穴住居跡四軒・ 跡全体としては弥生 土遺物からみて鎌倉時代のものであろう。 このうち住居跡は土師器や須恵器が出土している 掘立柱建物跡四棟· 時代から鎌倉時代にかけての集落跡で、 ~二九㍍の丘陵東側縁辺部に所在する。 掘立柱 貯蔵穴二基などが調· 建物跡についても 方 査